

「そのときは笑って」

アトリエ カルヴァドス 制作

大宗せいる 著

草原の国ガイゼルの都は、その日も見事に晴れわたっていた。青みを帯びた初夏の陽射しが、無数の墓石に照りかえす。その眩しさに眼を細め、ヴォルグは額の汗を拭った。

「こりゃ、いよいよ日照りも本番かな」

人気のない共同墓地には、色とりどりの蝶達が群れ集っている。鼻先をかすめる彼らをやり過ぎつつ、ヴォルグは出口への石畳に歩みを進めた。すっかり乾ききった風を受け、あちこちの献花がかさかさざわめく。

ここにくると、やはり気が重くなる。久しぶりの訪問だから、明るく会いたいのはやまやまだ。が、いくらそう思っても、あの光景が蘇ってきてしまう。

「んんー、ふわああ」

緑青の浮いた、出口のアーチをくぐったところで、ヴォルグは力いっぱい伸びをした。頭からすうっと血の気が引いていき、やがてこめかみが熱くなる。人通りのなかで彼女の声が弾けたのは、まだそれが治まりきらぬうちだった。

「あれえ？ ヴォルグじゃないの」

首を振り向けたその先で、草色のスカートが翻る。リボンでまとめられた長

い栗毛が、駆け足に合わせてさらさら揺れた。

「そんなところで一体なにやってんのよ？」

「言わなくたって分かるだろ？　ここをどこだと思ってるんだ」

「へえ、やっぱりかあ。剣も楯も持っていないから、そうじゃないかとは思ったのよ。でも、あんたが墓参りなんて、ちょっとぴんとこないじゃない？」

「はは、確かにそうかもしれないな」

街から街へ、国から国へ。そんな長旅の商隊を、様々な危険から守りぬく。そんな護衛者にとって、戦いは日常茶飯事なのである。これほど墓参が似合わない職業も、そんなに多くはないだろう。

「だけど、お前こそ油売ってていいのかよ？　さぼってるの見つかっちゃって、職替え延期なんて落ちはなしだぜ」

「ちょっと待ってよ。私のどこがさぼってるって？」

反動のつけられた細腕が、ばんばんの皮袋を差し上げた。半開きの閉じ口から、色とりどりの野菜や柔らかそうなパンが顔を覗かす。

「これ見れば分かるでしょ？　買い出しよ、買い出し！」

彼女は名前をシエラといい、本業は自分と同じ護衛者だ。が、その旅の合間を縫っては、こうして酒場の給仕として働いている。

法術の腕に加え、護衛の実績も一級品の彼女が、臨時雇いをする必要など本来まったくないはずだ。なのに彼女は自ら望んで、多忙な暮らしを送っている。

「それよりさ、この国って一体どうなっちゃってるの？　このパンなんか、昨日より一割高くなってるのよ」

透きとおった青い瞳が、袋のなかを睨めつける。憤懣やるかたない口調から

して、売り子とやり合つてでもきたのだろうか。

「客を莫迦にしちゃつてさ！ まったく冗談じゃないわよね」

「そんなに怒りなさんなつて。今年は日照りになりそうだから、少しくらいは仕方がないさ」

「市場でもそれとおなじ説明されたわ。何年かに一度、こういう夏があるんですって？」

呆れた口調もさもあらん。シエラははるか南の侯国、レフィタルの出身なのだ。対岸が見えないほどに広大なヌレイエフの泉、その中央にそそり立つ濃緑の巨大樹、さらには果てしなく続く深い森。そんな断片的な話だけでも、豊かで暮らしやすい土地なのだろうと想像がつく。

「これくらいならまだましさ。物の値段だって、それほど酷くは上がってないしね。いつもは、野菜なんてなかなか手に入らなくなるんだぜ」

「やだやだ。考えるだけでもぞっとするわね」

風に靡く栗毛を押さえ、シエラはうんざりした表情を天へと向けた。

「さて、と。そろそろ店に戻らなくっちゃ。あんまり道草くつてると、本当にさぼつてると思われちゃうわ」

「じゃあ、店が引ける頃に顔出すよ。こっちの仕事の打ち合わせ、いつもみたいにするんだろ？」

「勿論よ。それじゃ、後でね」

みるみる遠ざかった赤いリボンは、ほどなく人混みのなかへと紛れていった。それを笑顔で見送った、ヴォルグの身体が静かに回る。

——また顔見せに来るからさ。期待しないで待っていてくれよ。

頭を垂れ、暫しのあいだ瞑目してから、彼はその場を足早に立ち去った。

大神殿の鐘の音が、平和な一日の終わりを告げる。空を駆け下りた太陽がほどなく姿を消してしまうと、街壁の向こうから冷たい風が吹きこんできた。

この時期のガイゼルは、昼夜の気温差がかなり大きい。薄暮が消え去る頃ともなれば肌寒さすら感じるほどで、身体を縮こませた人々が忙しない足取りで家路を急ぐ。そんな彼らと入れ替わりに、ヴォルグは再び街に出た。近くの酒場で腹ごしらえをし、それからシェラの働く店へと向かう。

葡萄酒で火照った頬を、撫でる冷気が心地よい。満天の星たちはいよいよよその輝きを増しつつあり、降りそそぐ月光が足下を柔らかく照らしてくれる。

「ナゼルの店か。考えてみると久しぶりだな」

知らず歩調が早まっているのに気づき、ヴォルグは小さな苦笑を浮かべた。

前日も仕事の打ち合わせで赴いたから、なんと晩春以来ということになる。

生まれ育ったこの街に、馴染みの酒場はいくつもある。だが、禿頭の主、ナゼルの店はなかでも特別な存在だった。取り立てて高級でも、また豪華でもないのだが、出される料理がことのほか口に合う。シェラに釘を差されていないならば、今でも通いつめていただろう。

「できるだけいいからさ、店を変えて欲しいのよ」

給仕姿を見られるのが、照れくさいということらしい。ナゼルに紹介したことを、その時は心底後悔したものだ。

色あせた、しかし見事な飾り布が吊るされた扉の前で、ほどなくヴォルグの足は止まった。布地に縫いこまれた主の名前を、壁の角燈がぼんやり浮かび上

がらせる。そしてその向こうから、微かに楽しげな賑わいが洩れでてきていた。

「へえ……。相変わらず流行ってるみたいじゃないか」

さつそく扉を開いてみると、織物で飾られた店内はやはりなかなかの盛況だった。二十あまりの卓のうち片手分ほどが空いてはいるが、看板間際としては上出来だろう。

「よお、ヴォルグ！ 元気だったか」

「あんまり顔出さないからよ、賊に殺られちゃったかと思っただぜ」

顔馴染みたちの呼びかけに笑顔で応えてみせながら、手近な席に腰かける。

「いらつしやいませ。ええつと……。何になさいますか？」

注文は見知らぬ娘が取りに来た。シエラとよく似た前かけに檸檬色の服、そして腰に巻かれた青い布帯、そのいずれもが真新しい。彼女が暇をとるということで、新しい給仕を入れたのだろう。

「赤を頼むよ。それと腸詰めを一皿」

「かしこまりました。それでは暫くお待ち下さい」

娘の表情は最後まで強ばり、お辞儀もぎくしゃくとぎこちなかった。入ったばかりのようだから、それも無理はないところか。自分が彼女の立場だったら、きつとあの程度ではすまないだろう。

「さあて、我が相棒は、と」

暗い店内を見渡せば、彼女は盆を片手に卓から卓へ、実に忙しく飛び回っていた。

「こんばんは。今日は何になさいますか？」

「お薦めは子豚のソテーです。とつても柔らかい、いいお肉が入ったんですよ」

柔らかで愛くるしい物腰は、普段の彼女とはまったく違う。滑らかな身のこなしも、やはりさすがの一言だった。本業に関しては言わずもがなだが、給仕としても相当のものに違いない。あちこちの男性客からやたらと話しかけられていることが、なによりそれを証明している。

たぶん彼らのほとんどは、給仕を離れたシエラを知らない。春に彼女と出会った時は、自分もやはりそうだった。いきなり仕事で一緒になって、ずいぶんと驚いたものである。ひょっとして双子の姉妹なのではないか？ 給仕の時とあまりの違いに、思わず疑ってしまったほどだった。

シエラの両親は、レフィタルの温泉町で宿屋を営んでいたらしい。ところが、十年ほど前に起こった戦がそのすべてを奪っていった。泣きながら独りさまよっていたところを後に義父となる護衛者、ゼフィルに助けられたのだという。

やがて成長した彼女は、迷わず義父と同じ道を選んだ。そして、護衛の旅の合間を縫っては、訪れた土地土地で臨時雇いをこなしてきた。給金の代わりにして、料理を教わるためだった。

本業の蓄えでいつか宿屋を再建し、訪れた客にそうして覚えた料理を振る舞う。そんな夢を抱く彼女は、それぞれの仕事に並々ならぬ拘りを持っている。

もはや、完璧主義と言ってもいいだろう。

なにもそこまでと感ずることも、正直なところなくはない。だが、そんな真剣さの裏側に、何人の違ったシエラがいることだろうか。酒場の客として知り合い、同業者として共に旅をし、そして仕事を離れた素顔に触れて、自分は彼女に惹かれていった。

「それにしても頑張ってるよな。お前、ほんとに大したもんだよ」

好物の赤葡萄酒を含みつつその仕事ぶりを追いかけているうちに、夜はいよいよ更けきつていった。あれほど賑やかだった店内に、もう残っている客は一人もいない。

「どうしてこうなっちゃうのかなあ。俺はもてなされる立場のはずなのに」
食べかすを集めながらの呟きに、卓上の布巾が動きを止めた。

「さつきまではね。でも、もう看板は過ぎたんだから、今は仕事仲間でしょ？」

「おいおい。そりゃ護衛者としての話だろ？」

「だから、その話をするために急いでるんじゃない。ほら、さぼってないで片づけ片づけ！」

「さぼってるって、お前ねえ……」

おんぼろ箒を差し上げて、ヴォルグは反撃を試みる。だが、おどおどとした呼びかけに、それは敢えなく頓挫した。

「あのお、失礼ですけど」

「え？」

振り返ってみれば、あの新人娘がモップを片手に立っている。

「先輩、こちらは護衛のお仲間ですか？」

「そうよ。そういえば、まだ紹介してなかったわよね」

「ヴォルグだ、よろしくな」

「こ、こちらこそ。ル、ルフールです」

ヴォルグが差し出した掌に、前掛けで拭われたそれが応えた。くりくりとした円い眼が、何度も瞬きを繰り返す。

「まだ入って三日なんで、先輩には色々教えてもらってます」

「あんだね、こいつに愛想振りまいたってなんの得にもならないわよ。それに、教えた覚えなんてこれっぽっちもないんだけど？」

「だろうなあ。案外、お前の方こそ世話になってるんじゃないのか？」

「な、なんですってえ」

激しく長髪を揺らしたシエラの、目尻がみるみるつり上がる。と、またもルファールの横槍が入った。

「そんなことありません！ 先輩、本当に凄いですよ。仕事ぶりを見るだけでも勉強になるんです」

接客の仕方や身のこなしにほとほと感心してしまったと語る、その表情は真剣だ。この程度の口論はいつものことだが、どうやら彼女の眼には違って映ってしまっただけらしい。

「早く、先輩みたいになりたいなあ。しばらく一人になっちゃいますけど、頑張って巧くなっておきますね」

「はいはい、期待してるわよ」

呆れているのか照れくさいのか、振り向けられた微笑みをシエラは掌でさえぎった。

「それじゃ明日からの仕事のために、そろそろお家に戻りなさい。後はこいつと私でやつとくからさ」

「え？ でも、それじゃあ」

「口答えなんて可愛くないわね。先輩の好意が受け取れないわけ？」

「あ、い、いえ！ そんなことありません」

「それなら、ほら。ぐずぐずしないでさっさと帰る」

「……分かりました。それじゃ、お言葉に甘えさせていただきますね」

名残惜しげな笑みを残して、彼女はモップを片付けはじめた。去り際に扉の前で立ち止まり、ぺこりと一礼してみせる。

「いい娘だねえ。お前の後輩には勿体ないな」

ここぞとばかりに仕掛けたが、シエラは乗ってこなかった。代わりに呆れ返った表情が、ヴォルグの顔をじっと見上げる。

「あーあ。また始まった、か」

「ん？ なんだって？」

「なんでもないわよ！ それよりさっさと終わらせて、仕事の話ははじめましょ」
シエラはふいとそっぽを向いて、再び卓を拭きはじめる。旅の行き先を帝都に決めて二人が家路に就いたのは、蒼く輝く満月がもう天頂を過ぎてからのことだった。



ガイゼルの国都の街路図は、ある意味非常に特徴的だ。中央部を貫く街道沿いに外縁の石壁が入りこみ、街並みを東西に隔てているのだ。戦乱期の名残というのだが、現在の住人達にとっては迷惑なことこのうえない。

相互の行き来を保つため、壁にはいくつもの門がある。そのなかで西地区最大のものが月の門だ。周囲の街壁からさらに一段高くなった巨大な石造建築物で、人や荷の往来がこの街で最も激しい場所である。その間を紙一重ですり抜けながら、ヴォルグとシエラは懸命の疾走を続けていた。寝つきが悪かったせ

いなのか、それとも眠りが浅かったのか、持ち慣れた剣や楯がどうにも重くて仕方ない。

「あ、あれほど念を押しただのに、よくも寝坊してくれたわね！」
掠れきった非難の声が、胸にぐざりと突き刺さる。

「そんなに怒るなって。さつきから、もう何度も謝ってるだろ」

「怒るわよ！」

なめらかに靡く栗毛の向こうで、汗の滴が飛び散った。

「覚悟しときなさいよ。仕事取り損ねでもしたら、責任とってもらうんだからね」

「責任って言ったってなあ。そんなの、どう取ればいいんだよ？」

苦りきつての問いかけに、しかしシエラは答えなかった。いや、答えられなかったのかもしれない。

空は昨日以上に晴れわたり、昼近くになって気温もどんどん上がってきている。そんななか、全力で長い距離を駆けてきたのだ。女性としても小柄なシエラに、それが堪えていないはずはない。

こうして急いでいるのには、当然ながら理由があった。

自分たちは通常、仲介屋を通して商隊からの依頼を受ける。彼らの元には日々新しい仕事が入ってくるが、美味しい話となるとそのなかのほんの一部だ。獲得競争はなかなか厳しく、受け手は開店早々に決まってしまう。それ故に朝一番で赴くつもりが、目覚めればとっくに約束の時を過ぎていた。

「あー！ もういやっ！」

延々待ちぼうけを喰わされた、彼女の怒りも当然だ。今回ばかりは、まった

く言いわけのしようもない。

「ほら、もう少しだから頑張ろうぜ」

「え、偉そうに言わないで。元はといえば、あんたのせいでしょ！」

門の真下を左に折れて、細い砂利道へ走りこむ。途端、人の流れはぱたりと途絶えた。散乱する生ごみを飛び越え、昼寝の野良猫をたたき起こして進んでいくと、ほどなくお目当ての仲介屋が見えてくる。まだ駆けだしの頃から、ヴォルグが世話になってきた店だ。

それは周囲の民家に埋もれてしまいそうな木造平屋で、楯を型どった看板が扉口に下げられている。お世辞にも大手とは言えないが、親身に面倒を見られる店主、ダルアンを慕う者は多かった。

「うひゃあ。つ、疲れたあ」

両膝に手を突いたシエラが、苦しげな呻きを絞りだす。彼女はぐったりと頭を垂れて、丸めた背中を激しく上下させていた。無論、疲れているのはヴォルグも同じ。いくら力をこめてみても、膝の震えが治まらない。やむなく店の薄壁に、支えてもらうことにする。

護衛者としては、なんとも情けない姿であった。できることなら、こんなところを知人に見られたくはない。だが、ぱたぱたと近づいた足音に、そんな望みはたちまち潰えた。

「先輩、おはようございます！」

元気に声を弾ませたのは、誰あろうルファールである。

「護衛の時はやっぱりスカートじゃないんですね。でも、鎧姿もすごく似合ってます格好いいです」

跳ねあげられたシエラの顔に、驚きの表情が広がった。が、半開きの唇から、言葉は欠片も出てこない。「下手なお世辞を言うな」とばかりに、掌を揺らすのみだった。

「き、奇遇だな。まさかこんなところで会うなんて」

「偶然なんかじゃありません。ナゼルさんにここを教えてもらって、朝からずっと待つてたんです」

「朝からだって？ そりゃ悪いことしちゃったなあ」

「あ、どうか気にしないで下さい。私が勝手にしたことですから」

「どういうつもりだか知らないけどさ」

乱れきっていた息も、なんとか落ちついてきたらしい。背筋をだるそうに伸ばしたシエラが、遅ればせながら会話に加わる。

「用件は手短に頼むわよ。どっかの寝坊助のおかげで、仕事探しがまだなんだから」

「ほんとですか、先輩？ じゃあ、まだ決まっていなんでしょうね？」

「だから、これから探すって言ってるでしょ」

「ああ、良かったあ！」

歓喜の声を弾けさせ、ルフアールはぴよんと小さく飛び跳ねる。

「な、なによいったい。いきなり驚かさないでよ」

肩をすばめたシエラの非難も、彼女には聞こえていないようだった。胸元で合わされた掌に、そっと唇が寄せられる。

「あの、先輩、それにヴォルグさん。少しお時間をいただけませんか？ ここじやなんですから、そう……、祈りの道の広場ででも」

「あんだね、手短につて言ったの覚えてないの？ だいたい冗談じゃないわよ。いま来た道をあんなとこまで戻るなんてさ」

「そこをなんとかお願いします。大事なお願いがあるんです」

見開かれた円い眼は、みるみるうちに潤んでいった。思いもしなかったのだろう反応に、さしものシエラも激しくたじろぐ。

「ちよ、ちよつと待つてよ。なにも、泣かなくなつていいじゃない」

狼狽えきつた表情で、彼女はヴォルグを仰ぎみる。それに頷きで応えるまでに、さしたる時間はかからなかった。

大神殿を囲む老木の壁が、彼方で風に揺れている。そのさらに向こうから、やがて昼を告げる鐘の音が聞こえてきた。

噴水を囲む円形広場は、かなりの賑わいをみせている。露店はどこも行列で、並んだ長いすもぎっしりだ。着くのがもう少し遅かったなら涼しい日陰の確保はおろか、こうして座れすらしなかつたろう。

「なるほどね。つまり、兄貴の隊のお守りをしてくれないかって、そういうことかい？」

「はい。正確には兄さんのじゃなくて、ベリオール商店のですけど」
腕を組んでの質問に、ルファールはようやく口元を緩めてみせた。哀れなほどだった声の震えも、どうやら収まつてきたようである。

ベリオールはかなり大きな部類に入る、名の通った穀物商だ。取引量に相応しく複数の馬車隊を有しているが、彼女の兄、アルベインは新進気鋭の商隊長としてその一つを任されているという。

急ぎ帝都に赴いて、小麦の在庫を確保せよ。彼がベリオール直々の指示を受けてから、既に五日が経とうとしている。だが、懸命の準備にも関わらず、未だ出発の目途が立たないらしい。

「護衛者が集まらないそうなんです」

さもあらん。同業者のこと故、およその事情は察しがついた。

穀物を運ぶ商隊は、このところ盗賊の標的になっている。日照りの兆候が強まりつつある現在、彼らの持ち帰る小麦や豆は高騰の一途をたどるばかりだ。また、争奪戦の激化によって、買いつけの元手となる往路の積み荷も高価なものにせざるを得ない。盗人どもにしてみれば、往復どちらを襲っても外れる心配はないわけだ。

確かに、狙われて当然の状況ではある。が、腕に自信のある者や報酬額で釣られる者など、それでもお守りのなり手はいるはずだ。そんな連中にさえ敬遠されてしまうのは、即ちベリオールの商隊が狙われやすいからである。襲撃される確率が、他店に比べて高すぎるのだ。聞けばアルベインの一行も、先日荷を捨てる羽目になったという。

「兄さん、すっかり落ちこんでしまっているんです。お酒をがぶ飲みするのを見ているら、なにかたまらなくなっちゃって」

「事情はよく分かったけどさ」

噴水のきらめきを見やったシェラが、長靴の足を組み替えた。さらりと払われた髪のすき間に、鋭くなった瞳が覗く。

「あなた、勘違いしてんじゃない？ 私達は護衛者で、正義の味方じゃないんだからね。それにこっちの仕事に戻ったばかりで、いきなりそんなお勤めをし

るっていろいろの？」

「……やっぱり駄目、でしょうか？」

「そうじゃないけどさ。私を雇おうっていうんなら、相応の報酬を上乗せしてもらわよ。どう？ あんたにそれが約束できる？」

「そ、それは……」

「でしょ？ なら潔く諦めなさい」

「そう、ですよね」

きっぱりとした拒絶を、ルファールは微笑みで受け入れた。が、さすがに瞳の落胆までは隠しきれない。

「まだ知り合ったばかりなのに、こんなお願いする方がおかしいですよね」

「付き合いの長さなんて関係ないわよ。私が言ってるのは、仕事に情は持ちこめないってこと。悪く思わないでちょうだいね」

「よく分かります。お時間取らせちゃって、本当にごめんなさい」

深々とした一礼から、ヴォルグはたまらず眼をそらした。緩んだ口元のひくつきが、言いようもなく痛ましい。

「お仕事の無事を祈ってます。お身体に気をつけて、元気に帰ってきて下さいね」

「はいはい。言われなくなつてそうするつもりよ」

「それじゃ先輩。私、これで失礼します」

檸檬色の服を翻し、ルファールはゆっくりと踵を返す。その哀しげな後ろ姿に、ついに心のたがが弾けた。

「ちよつと待った」

意を決しての呼びかけに、踏みだされかけた足がぴたりと止まる。

「……はい？」

「なんなら引き受けてやってもいいぜ」

「ちよ、ちよっと！ あんた、なに言いだすのよ？」

顔を跳ねあげたシェラの叫びを、彼は突きだした掌で封じこんだ。あからさまな不満顔は敢えて無視して、きよんとしたルファールを視線で促す。

「そ、それ、ほんとですか？」

「ああ、勿論さ。ただし、上乘せ分はきっちり払ってもらうけどね」

「え？ で、でも、さつきそれは無理だって」

ルファールのか細い声は、そこでぷつりと途切れてしまった。真意を計りかねているのだろう。眉間に深くしわをよせ、なにごとか必死に考えこんでいる。

「俺の家の片づけ」

「は、あ？」

「帝都に行ってる間にさ、部屋の掃除をしよう。そういう契約でどうだい？」

「それだけ？ 本当にそれだけでいいんですか？」

「甘いな。自慢じゃないけど、うちの散らかりようは並じゃないぜ。それを綺麗にして、ついでに壁も拭いてもらう。もしかしたら、一日じゃ終わらないかもしれないぞ」

「やりますっ！ 兄さんを助けていただけれるなら、掃除くらいいくらでも！」

「はん！」

天を仰いだシェラの口から、やがて小さな笑いがあふれだす。

「どういうつもりよ？ まさか、あっちの仕事がらみじゃないでしょうね？」

「ば、ばか言えよ。それだったら条件なんかつけないさ」

思わぬ話を持ちだされ、彼は慌てて手首を振った。シエラと同様に、自分もまた護衛者以外の顔を持っている。が、その内容は、決して公にはできないものだ。本来なら相棒であるシエラにすら、知られるべきではなかったのである。

「あはは！ ただの臨時雇いの話でしょ。そんなに焦らなくていいじゃないか」

両手で腹を押さえつつ、シエラはそう話をぼかした。本気ではらすつもりなど、彼女もないに違いない。たぶん、勝手に話を決めたことへの仕返しだろう。

「じゃあさ、純粹に助けてあげようって、そういうわけ？」

「ああ、当たり前だろ」

ほっとしながら頷いた途端、脇腹に肘の一撃がめり込んだ。

「……！ いったー！」

「女に甘いのもほどがあるわよ！ いい、ルファール？ 私が戻ってきてからも、買い出しは当分あなたの仕事だからね」

「そ、それじゃ、先輩？」

「仕方ないでしょ、今さら一人で仕事探すのも嫌だしさ。ただ覚悟だけはしときなさいよ。こいつの部屋の話、大げさでもなんでもないんだから」

ルファールの表情が、たちまちぱつと輝いた。シエラにぱたぱたと走りより、その小柄な身体を抱きしめる。

「ありがとうございます！」

「や、やめなさいよ！ 人が見てるじゃない」

もがくシエラの叫声を、しかし彼女は意に介さない。

「さあ、さっそく店に行きましょう。兄さんをご紹介しますから」

「あ、い、痛い！ 痛いってば！ 自分で歩くから離しなさいって！」

実際のところ、どこまで知っているのだろう。ずるずる引きずられていく相棒の後ろで、ヴォルグはそんなことを考えていた。

初めて共にした護衛の仕事で、シエラは自分の秘密に気づいた。そして「あなたの素顔が知りたくなった」と、相棒になることを申しでた。惚れた弱みで受け入れてしまったが、やはり断るべきだったのか。

現在においても、彼女は詳しいことは何も知らない。いや、知らないはずだ。尾行られたことは何度かあったが、すべて途中で捲いている。雇い主との連絡にしても、悟られるようなへまはしていない。

もう諦めたとばかり思っていたが、あんな話を持ち出すということは実はそうではないのだろうか。だとしたら、今度は本気で止めさせなくては。あの雇い主は、それほど甘い人物ではない。秘密を嗅ぎ回っている者を、いつまでも放っておいてはくれないだろう。

「う、腕がちぎれるうっ！ くら、ヴォルグ！ ぼうつとしてないでなんとかしてよ！」

圧倒的な力の差に虚しい抵抗を続けつつ、シエラが半ば真剣な悲鳴を上げる。

だが、残念ながら、今の彼にそれは聞こえていなかった。



そして旅立ちの朝が訪れた。シエラの助言どおり、就寝前に何度も念じたおかげだろうか。予定よりもずいぶん早く、ヴォルグは眠りから抜けさせた。それからシエラと落ち合って、指定の集合場所へと向かう。そこは街を囲む大草原の一角で、様々な店の商隊が慌ただしい出発準備を進めていた。

朝露のきらめきのなかを人馬が行き交い、あちこちで張りあげられる声が草の香に満ちた空気を震わす。何度か視線を巡らせた二人は、やがてそのなかにお目当てのアルベインを見つけた。男にしては長い髪を靡かせながら、彼は部下達になにやら指示を飛ばしている。

「お、いたいた」

「あら？ こっち指さしてるの、あれルフアールじゃない？」

シエラが顎で示した先で、檸檬色の服が飛びはねた。おそらく、大好きな兄を見送りにでも来たのだろう。仕事に没頭している彼に二言三言声をかけ、それから真っ直ぐこちらに駆けよってくる。

「先輩、おはようございますー！」

弾けるような挨拶に、シエラはびくりと身を引いた。どうやら昨日の経験が、相当堪えているらしい。

「あれ？ どうかしたんですか？」

「あ、あはは、なんでもないから気にしないで。それよりさ、朝っぱらだつてのにはほんと元気ね」

「はい。朝つて大好きなんですよ。空気は綺麗だし、瑞々しいし。なにかこう、力が漲ってくる気がしませんか？」

「冗談じゃないわよ。やっぱり避けといて正解だったわ」

真剣そのものの眩きに、ヴォルグは思わず嘖きだしかけた。が、たちまち睨みつけられて、慌てて口元を押さえこむ。と、そこに、アルベインがやってきた。

「やあ、来てくれたか」

「おはよう。もう積みこみは済んだのか？」

握手を交わしながらの問いかけに、彼は力強く頷きかえす。

「ああ。荷の数をもう一度確認したら、いよいよ帝都に出発だ。それもこれも、あんた達が引き受けてくれたおかげだな」

「できた妹さんに感謝することね。こんな依頼、普通なら絶対断つてるところなんだから」

「先輩、それにヴォルグさん、本当にありがとうございます。道中、兄さんを、いえ商隊をどうぞよろしくお願いします」

「任せときなさいって。いきさつはどうあれ、引き受けた以上はきちんと仕事するからさ」

——ああ。そうしたいのはやまやまだけどな。

無言で頷く裏側で、ヴォルグの心に影がさす。シエラが勘ぐっていた通りに「あちらの仕事」が絡んでくるとは、つい先刻までまったく思っていなかった。

憂いをもたらしたのは、一枚の羊皮紙だった。部屋の扉に挟まれていたそれは軍の重鎮、リュティスからの指令書である。届け方自体はいつもと同じで、今さら驚くわけもない。問題は、そこに記された内容だった。相手がただの賊でないのなら、おそらく苦しい旅になる。

無論、そんな仕事にシエラを連れていきたくはない。だが、この期に及んで

説得しても、彼女は聞き入れてくれないだろう。急な話は毎度のことだが、せめて夕べのうちに知らせておいてほしかった。

「とにかくにも頼りにしてるぜ」

「え？」

ぽんとアルベインに肩を叩かれ、彼はようやく我に返った。

「まあ、ご期待に添えるよう頑張るよ」

もはや腹を据えるしかなさそうさ。いくらリュティスを恨んでも、今さらどうにもなりはしない。彼はこの場にいないのだし、拒否する権利などそもそも与えられてはいないのだから。

「さっさと準備を済ませちまうから、もう少しだけ待ってくれ。他の護衛者連中は、と……。ああ、あそこにいるから」

すつと伸ばされた指先が、馬車群の一角に向けられる。そこでは一目で同業者と分かる集団が、輪になってなにやら話しこんでいた。

「了解。それじゃ、挨拶を済ませとくことにするよ」

「ほら、そうと決まったらさっさと行きましょ」

「え？ ああ、そうだな。だけど、そんなに慌てるなって」

苛立たしげな相棒を咄嗟の笑みで宥めつつ、ヴォルグは喧噪のなかを歩きはじめた。こうして見る限り、集まった者のなかに知った顔は一人もない。昨日ルファールが語ったとおり、ほとんどは流れの護衛者らしかった。

「よお、いい朝だな」

「ごきげんいかがあ？」

声を揃えた二人の元へ、視線が一斉に振りむけられる。

「ええっと、俺はヴォルグ。昨日アルベインから依頼を受けて、一緒に行かせてもらうことになったんだ。で、こっちは」

「シエラよ。短い間だろうけど、どうぞよろしく」

「おお、話は聞いてるぜ」

「歓迎するよ。なにしろ、あんたらのおかげでやっと出発できるんだからな」
笑顔で迎えてくれた彼らのうち、自分と同じ剣術組は約八割、十五人といったところだろうか。一様に屈強そうで心強く感じる反面、シエラたち法術使いの少なさが気になった。剣と術の連携は、どんな戦いにおいても重要だ。それ如何によつては、多少の戦力差など簡単にひっくり返る。

仮にも商隊長であるアルベインが、それを知らないはずなどない。だが、状況が状況だけに、配慮の余裕はなかったのだろう。

「なあ。こうなつてくると、お前の術が頼りだな」

そんな彼のささやきに、なぜかシエラは答えなかった。この構成はなんなのだ。そんな不平の一つも、飛んでくるかと思つたのだが。

「……？ ん？」

彼女はその眼を大きく見開いて、ただ呆然と立ちつくしている。口元を覆った両手の下で、ほどなく上擦った声色が紡がれた。

「う、そ……。フィアンナ、なの？」

凍りついたかのような視線の先には長い髪を編みこんだ、細身の女性の姿があった。薄い桃色のスカートが、風をはらんでふわりと膨らむ。皮鎧の腰に法杖を下げていることからして、おそらくは後衛組の一人だろう。

「シエ、ラ？」

驚きから喜び、そして戸惑いと目まぐるしく変化した美貌は、やがてすべてが抜け落ちた、無感情なそれで固まった。

「ひ、久しぶり。元気だった？」

「決まりきったこと聞かないでくれる？ そんなこと、ほんとはどうでもいいくせに」

ぎこちなく差し込まれた掌を、琥珀色の瞳が睨めつける。と、シエラの喉が微かに、しかし確かにごくりと鳴った。

「それにしても、あなたと一緒になっちゃうなんてね。ガイゼルになんか、やっぱり来るんじゃないかなあ」

祖国と相棒を小馬鹿にされて、ヴォルグの口がへの字に曲がる。

「誰だよこいつ。知り合いなのか？」

「ん、ちょっとね。昔の……、仕事仲間なの」

「へええ、なかま、ね」

フィアンナはそこで若干の間を挟み、大げさにふんと鼻を鳴らしてみせた。

「まあ、間違っちゃいないけど」

こうまで露骨に挑発されて、シエラが我慢できるはずはない。大騒動になることを、ヴォルグはいよいよ覚悟した。が、こめかみに響く金切り声は、いつまでたっても聞こえてこない。

「……？」

傾けた視界を回してみると、彼女は気まずげに顔を背けた。そのあまりの弱々しさに、ヴォルグは思わず言葉を失う。いったいどうしたことなのか、まったくわけが分からなかった。

「なんだか拍子抜けしちゃうわね。なんにも言い返さないなんて、あなたらしくないじゃない」

嘲りたつぷりの抑揚に、またも神経が逆撫でされる。だが、中身だけで言うならば、フィアンナは彼の疑問をそのまま問うてくれていた。

気まずい雰囲気は漂うなか、シエラがその身を縮こめます。彼女はわずかに俯いて、ただただ口ごもっているのみだった。

やがてアルベインの号令がかかり、商隊は帝都を目指して出発した。積み荷は一級品の絹織物で、なかには滅多にお目にかかれない黄金繭製のものすらあるという。まずはこれらを売りさばき、その儲けで小麦を買いつけようというわけだ。

日が経つにつれて、ガイゼルの穀物相場はますます上がっていくだろう。営者達にしてみれば、まさに千載一遇の好機に違いない。が、指令書によれば、ベリオール商店の目的は他のところにあるらしい。

「襲われるの承知で出かけるんだから、あんた達も大変だよな。まあ、それだけの見返りはあるんだろうけど」

夕食をぱくつきながらのかまかけに、アルベインは小さな苦笑で応えてみせた。満天の星空の下、焚き火の薪がぱちりと弾ける。

「確かにね。でも、実はそれだけじゃないんだよ」

「あら、なんか意味ありげな言い方じゃない」

シエラの横槍を聞きつけて、周囲の護衛者達が興味深げな視線を向けた。流れである彼らも、薄薄は事情を知っているのだろう。

「商人の仕事は儲けることでしょ？ 他にいったい何があるのよ？」

「うーん。どこから話したらいいのかな」

長い髪を掻きあげて、アルベインは困惑の表情をわずかに伏せる。

「少し長くなっちゃうけど……、つまりはこういうことなんだ」

日照りの兆候が強まっていくなかで、国都の穀物商たちは二派に分裂しつつある。この機会に大きな富を得ようとする多数派と混乱を少しでも抑えようとする少数派が、日に日に対立の度合いを深めているのだ。そしてその混乱は、いまや城の貴族たちをも巻きこみつつあるという。

ベリオール商店は、後者のまとめ役とでも言うべき存在だ。とある筋からの補助金を頼りに、小麦の暴騰をなんとか回避しようとしている。

それが「穀物商としての責任」だとアルベインは言った。その一翼を担えることを、自分は誇りに思っている。だからこそ焦っていたし、今度こそは決して失敗したくないのだと。だが、そんな彼の熱弁に、シエラは大きな欠伸で応えた。

「そりゃまたご立派なお話だけど、熱くなりすぎないように頼むわよ。無茶に巻きこまれて死んじゃうなんて、私はまっぴら御免だからね」

「おいおい。やめとけって」

はらはらしながらの囁きを、しかしシエラは意に介さない。この手の話が嫌いなことは、これまでの付き合いで知っている。が、それをわざわざ表に出して、相手を怒らすことはあるまい。案の定、アルベインは唇をぎゅっと噛みしめて、彼女を睨みつけている。と、そこで思わぬところから、シエラへの攻撃が放たれた。

「驚いちゃったわ。あなたの口からそんな台詞が聞けるなんてね」

振り返ってみると、いつの間にかフィアンナが立っている。炎に照らされた美貌にはそれにおよそ似つかわしくない、意地悪な笑みが満ちていた。

「アルベインさんをああだこうだ言う前に、もっと自分のこと考えてみなさいよ」

「なんだよ、いちいち突っかかってくるじゃないか」

「あらあら、随分と相棒思いなのね。忠告しとくけど、あんまり信頼しすぎない方がいいわよ。いつか後悔する時がくると思うから」

「……？ どういう意味だよ？」

その問いかけに、しかしフィアンナは口を噤んだ。その嘲るような視線の先で、シエラが身体を跳ねあげる。

「そ、そんなことどうでもいいでしょ。私、もう寝るわ」

狼狽も露に言い残し、彼女は脱兎の如く駆けだした。何度か激しく躓きながら、まっすぐねぐらの馬車へと向かう。

「お、おい、待てよ！」

ヴォルグの呼びかけにも、小柄な身体は止まらなかった。その姿が馬車の荷台に消えたところで、フィアンナはようやく先刻の答えを紡ぐ。

「本人に聞いてみたらいいじゃない。たぶん、今みたいにごまかされるでしょうけど」

———どうということだ？

冷めたスープをすすりつつ、ヴォルグは燃え盛る炎を見つめる。しかし、いくら考えたとして、答えが見つかるはずなど勿論なかった。憩いの一時は間もな

く終わり、彼らは三々五々、割り当ての馬車で眠りについた。

「うう、冷えるなやっぱり」

ヴォルグが用足しに起きだしたのは、仲間たちのいびきがそろそろ大きくなりはじめた頃だった。暗闇を走る冷たい風は、とても初夏のものとは思えない。

四方に燃える焚き火の脇で、見張りの仲間が身を寄せ合っている。その視線に小便の仕草で応え、ヴォルグは路傍の草原に分け入った。と、月明かりのなかに、ぽつんと誰かが立っている。

——敵か？

腰の剣に伸びた手は、しかし握りに触れたところで静止した。ふと強まった寒風に、栗毛が靡いたからである。まったくなんのことはない。独り星空を見上げていたのは、他ならぬ相棒だった。

慌てる必要がないのなら、こちらの始末が先決だ。ほっと息をつきながら、ヴォルグはくるりと背を向ける。

派手な水音と草葉の鳴りも、彼女には聞こえていないらしかった。見張りの交代までまだまだあるはずなのに、いったい何をしているのだろうか？ 今夜の冷えこみは、いつにもまして厳しいものだ。毛布も羽織らずにああしては、身体に堪えないはずがない。

「この真夜中にお散歩かい？」

「……！ えっ？」

背後からの呼びかけに、小柄な身体がびくりと震える。振り向けられた鋭い視線は、しかしすぐに安堵のそれへ変わっていった。

「なんだ、あんたか。うん、ちょっとね、考えごとしてただけ」

「もしかして、さっきのことか？」

「……まあね」

「なあ。昔、彼女となにかあったのか？」

「そんなこと、あんたには関係ないでしょ」

思い出させるのはよしてくれ。シェラの瞳はそう言っている。こういう時の彼女は、おそろしく頑なだ。ここで退かなければどうなるか。それは、おおよそ予想がついた。

「そりゃ、そうだけどさ。でも、なあ」

「別にいいじゃない。お願いだから放っておいてよ」

「……相棒がけなされてるのに、ほっとけるわけないだろう？」

そして、ついに瘤癩玉が破裂した。

「あー！　なんでいつもそうなのよ！」

両の拳を揺らしつつ、たじろぐヴォルグを責めたてる。

「そのお節介、いい加減に直しなさいよ。そういうの嫌いだって、もう何度も言ってるじゃない！」

「わ、分かったよ。分かったから、そんなに興奮するなって」

こうなってしまうっては、もう何を言っても無駄だろう。素直に引き下がるしか、仕方があるまい。

「身体冷やさないように気をつけろよ」

立ち去り際の一言に、彼女はふいと背を向ける。そんな拗ねた子どもの如き仕草が、ヴォルグにはとても哀しげに感じられた。

——どうしたんだよ？　なに意地張ってんだ？

言えなかった問いかけを反芻しながら、彼は独りねぐらに戻る。と、そこにフィアンナが立っていた。はっと振り上げた視線の先で、穏やかな微笑みが美貌に宿る。

「仲がいいのね。さすが相棒ってどこかしら？」

「……盗み見なんて趣味が悪いな」

「別にそんなことしてないわよ。あたしにだって、用を足すくらいの権利はあるでしょ？」

けろりとした切り返しに、ヴォルグは思わず言葉に詰まる。その表情を覗きこみ、フィアンナはくすくすと肩を揺らした。

「ねえ、あの娘どんな調子なの？ ガイゼルでも元気でやってる？」

「ああ、元氣すぎるくらい元氣だよ。あんたに会ってから、ちよつと様子がおかしいけどな」

「そう苛めないですよ。ね、そんなことより仕事の方は？ もしかして、今でも給仕つづけてたりして？」

「なんだよ。嫌ってるわりには、ずいぶん色々知りたがるんだな」

「えっ？」

そこで、彼女ははじめて真顔に戻った。編みこんだ髪を揺らしつつ、左右に首を傾ける。

「あたし、そんなこと言ったかしら？」

「とぼけるなよ。あの態度を見てりゃ、誰だってそう思うさ」

「そうかあ……。うん、それじゃそういうことしておくわ。いちいち説明するのも面倒くさいし」

冗談めかしてみせてはいるが、彼女もまたそれに触れたくないのだろう。波打ち上擦った抑揚が、なによりそれを証明している。

「さ、お互いすつきりしたところで、もう一眠りしときましょ。ちゃんと疲れをぬかないと、見張りの時に辛いわよ」

彼女が残した微笑みに、先刻の刺々しさは欠片もなかった。ますますわけが分からない。嫌っていないというのなら、あの言動はなんだったのだ。

くるまり直した毛布のなかで、ヴォルグは寝返りを繰り返す。抑えきれない苛立ちに、彼の眼はすっかり冴えてしまっていた。



はるかに続く草原は、その日も至って平穏だった。またがった馬の歩みにあわせ、陽射しが虹色のきらめきをまき散らす。国境を越えてから二日が経ち、帝都への道のりも約半分を消化した。地図のうえではわずかな距離であるものの、空の色も雲の形も風の香りも、すべてが故国のそれより柔らかい。

ここまでの道のりは、驚くほどに順調だった。なにしろ賊はおろか、獣の襲撃にすらあつてはいない。

おそらく小麦を満載した復路の方が、危険ははるかに大きいだろう。日照りの進行を考えれば、その方が相手としても美味しいはずだ。

そんな大方の予想がもしも当たっているならば、出番はまだまだ先になる。だが、それとは違う要因で、ヴォルグの不安はますます大きくなりつつあった。

——あいつ、また咳こんでるよ。

そつと流した視線の先で、シエラは気怠げに手綱を操っている。話しかければいつも通りの、いやそれ以上の明るさで応えてくれるのだが、それでも顔色までではごまかせない。瞼は腫れぼったく、白眼もひどく充血している。

昨晚もその前も、彼女は独りで夜空を仰いでいた。そんなことを続けていては、疲れの抜けるわけがない。夕べあたりからの濁った咳も、ここにきて相当ひどくなってきた。

「なあ、ほんとに大丈夫なのか？ きついんだったら、今日だけ誰かに代わってもらえよ」

「嫌よ！ そんな情けないまね、絶対いや！」

張りあげられたがらがら声が、またも激しい咳を誘った。引きつけでもおこしたように、小さな身体が大きく揺れる。

仕事に対するシエラの拘り、そしてそれを貫けるだけの実力は、相棒として充分すぎるほど知っている。が、今回ばかりは、さすがに苦しいのではなからうか。

こいつの調子が戻るまで、このまま放っておいてくれ。

はるかな地平を見やりつつ、ヴォルグはまだ見ぬ敵に願いを向けた。しかし期待はその晩に、あっさり裏切られることとなる。

二人が見張りに起きだしたのは、満天の星たちがその輝きをもっとも増す頃のことだった。未明の草原はすぎるほどに静かで、いつもの風すらもまったくない。震えがくるほどの冷えこみを除けば、至って平和そのものだった。馬車群を囲む暖かな焚き火、その一つの傍らに彼らは鎧姿の腰を並べる。

「ここは俺だけでいいからさ。朝までゆっくり眠ってろよ」

「駄目よそんなの。あんたに任せとけるわけないじゃない」

暗闇を凝視しつつの促しに、シエラは頷こうとしなかった。だが、それは予想のうちである。ここで引き下がってしまったら、敢えて口に出した意味がない。

「お前な。意地張るのもいい加減にしておけよ」

いくぶん強めた語気を浴び、彼女はほんのわずかに仰け反った。

「な、なによ。そんな顔したって、怖くなんかないんだからね」

「そうか？ それじゃ、こうするしか仕方がないな」

かくなるうえは、力づくでもねぐらに押しこむ。そう決意したヴォルグがすつくと立ち上がった刹那、炎の向こうで仲間が叫んだ。

「来やがったぞ！ ……敵だっ！」

その指先を辿っていくと闇から滲みでるように、いくつもの人影が現れた。

一斉に抜き放たれた剣が、淡い月光にぬらりと輝く。

「奴ら、すぐに襲ってくるぞ！ 火を大きくしてみんなを起こせ！」

次々と起きだしてきた、護衛者たちの対応は早かった。馬車を取り囲むようにして、たちまちに輪形陣が組みあがる。そして始まった戦いはヴォルグが憂いていた通り、かなり苦しい展開となった。

護衛者は、言ってみれば戦いの専門家である。国同士の争いが無い現在、その戦闘経験は軍の兵士よりも豊富だろう。故に不意をつかれでもしなければ、並の盗賊達に押されはしない。ところが、そんな彼らが、今夜ばかりは荷を守るのに精いっぱいだった。

敵は後方に位置する男の笛に従い、法術の援護の下に一点突破を目指してく

る。ばらばらの鎧や剣でそう装ってはいるものの、やはり寄せ集めの盗賊ではない。明らかに訓練を受け、組織化された集団だった。

「つりゃあ！」

怒号と足音が入り乱れるなか、ヴォルグの剣が閃いた。生臭い霧を噴き散らし、眼前の男が倒れこむ。だが、敵の数はまだまだ尽きず、戦意も一向に衰えない。息を整える暇もなく、新たな敵が現れる。

「畜生、次から次へと……！」

いくぶん重く感じはじめた剣を、ヴォルグは再び構えなおした。と、その両脇を、いくつもの黒い塊が飛走していく。背後のシエラが放ってくれた、援護の術に違いない。

「ぎゃっ！」

敵に悲鳴を上げさせたのは、握り拳ほどの石ころだった。たまらずよろめいた隙をつき、鎧の腹に剣身がめりこむ。

こちらの心配にも関わらず、シエラの戦いぶりは鮮やかだった。背後で体力を温存しつつ、咳を上手にやり過ごす。そして、ここぞという時の法術がとても病人とは思えぬ冴えで、敵を散々に打ちのめしていた。

「いい間合いだっとな。おかげで助かったよ」

「そりゃ、ね。これでもあんたの相棒なもの」

親指を突き立てたその先で、青ざめた表情がかすかに緩む。だが、駆けてきたフィアンナの呼びかけに、たちまちその微笑みは消え去った。

「これじゃちがあかないわ！ 昔のあれでなんとかしましょ」

ごほごほと咳こみながら、シエラは無言で頷いた。長引く戦いがさすがに堪

えはじめているのだろう。ふらふらとした足取りで、フィアンナの横に進みでる。段違いの肩を並べた二人は、そこでまったく同じ法語の節を紡ぎはじめた。

《吹き行く風よ、ここに集え》

《大いなる主の許しを請うて》

《暫しその流れを我が意に委ねよ……》

見事に重なった音程がぴたりと合って終わるや否や、夜の冷気がひゅうつと鳴いた。草葉の揺れはたちまち緑の波となり、もうもうと舞い上がった土埃が双子の竜巻を形成していく。二人の視線の動きに合わせてそれは次第に仲良く寄り添い、そしてほどなく一つになった。

「おいおい。すごいな、こりゃ」

姿勢を下げたヴォルグの口から、あきれたため息が流れでる。

シエラの十八番であるこの術に、立ち会ったことは何度もあった。だが、二人がかりで操られる今夜の風の激しさは、そのいずれとも比較にならない。

荒れ狂う竜巻を前にして、敵は成す術もないようだった。抗しきれなかった者達が急流でもまれる木の葉の如く、くるくると土煙に吸いこまれていく。だが、そこでシエラの身体に異変が起きた。

ふわりと栗毛を翻らせて、彼女がこちらを振り向いた。ヴォルグの眼にはそう見えた。だが、その身体の捻れが、どこまでいっても止まらない。歪みに耐えきれなくなった膝がやがてがくりと折れるや否や、彼女は大地に突っ伏してしまった。

「な、なに？ いきなりどうしちゃったのよ？」

悲鳴に近い問いかけに、しかしシエラは反応しない。渦は跡形もなく弾け散

り、難を逃れた敵がフィアンナに向かって殺到してくる。ヴォルグの奮闘がなかったら、彼女はたちまち斬り刻まれてしまっただろう。

ほどなくすると、戦場に長い笛の音が響きわたった。途端、あれほどしつこかった賊達が、まるで潮が引くように後退していく。決して完璧ではなかったにせよ、二人の風の法術は彼らに大きな動揺を与えたいらしい。

「大丈夫か？」

彼らの姿が消えきる前に、ヴォルグは倒れた相棒へ駆けよった。見れば固まりきらない血糊がその顔や髪、それにリボンをべっとり汚している。

「シエラ？」

「ん、心配しないで。……あんたが斬った奴の返り血よ」

慌てて抱きおこすヴォルグを、彼女は弱々しい微笑みで見上げてみせた。なにはともあれ一安心だが、それでも旅を続けるのは無理だろう。袖越しに伝わってくる熱さと震えが、なによりそれを証明している。

「ばか野郎、だから無理すんなって言っただろ」

笑いを含ませた叱責に、シエラの唇が微かに動く。が、絞りだされたその声は、フィアンナの喚きにかき消されてしまった。

「あなた、いったい何やってんのよ。おかげで死ぬとこだったじゃない！」

「仕方ないだろ。こいつ、ずっと調子が悪かったんだ」

「そんなのただの言い訳でしょ。肝心な時に戦えないなら、護衛者なんてやめちゃいなさいよ」

「……なんだと？」

険しくなったヴォルグの視線に、しかし彼女は怯まない。耳の先までをも赤

く染め、シエラの青ざめきつた顔を覗きこむ。

「あなたの情けなさには、つくづくがっかりしちゃったわ。そんなことで、よく独りでやってこれたわね」

「もう止せよ！」

自戒の堰が崩れ落ち、ヴォルグはついに声を荒げた。だが、そっと頬を撫でた掌が、さらなる怒声を抑えこむ。

「やめて。フィアンナの言うとおりよ」

「え？ だけど……」

虚ろな瞳でヴォルグを見上げ、彼女はただ、無言で首を振ってみせるのみだった。

寝台が二つ並べられただけの粗末な部屋を、静かな風が吹きぬけていく。ひんやりとした感触が、日焼けした肌に心地よかった。

街道を見下ろす窓の外には、今日もまぶしい陽射しが降りそそいでいる。だが、その熱さもさすがにここまでは届かない。

この安宿にシエラを運びこんでから、もう二日が過ぎ去った。施療師の薬が効いたのか、病状は一気に好転しつつある。眼下の寝台ですやすや眠る、その顔色もかなり良くなってきたようだ。

「仕事の方は大丈夫。帝都に着くまで、積み荷はちゃんと守ってみせるわ。だから、あなたはこの部屋で、シエラと一緒にいてあげて」

フィアンナが別れ際に浮かべた笑みは、穏やかであり寂しげだった。リボンの外された長い栗毛を、しなやかな指先が整える。

「そうそう。なんか誤解してるみたいだけど、あたしこの娘を嫌ってなんかいないわよ。ね、シエラ？　そうだよね？」

そうでなければ、あんな大人げない真似などしない。ぽつりと洩らされた眩きは、シエラには聞こえていなかっただろう。彼女は苦しげに呻きつつ、寝返りを繰り返すのみだったから。

「まったくなあ。我が相棒はいったいどうしちゃったんだか」

ため息混じりに呟くと、シエラの瞼が静かに開いた。

「ごめんね。私のせいで、あなたの仕事まで駄目にしちゃって」

「ん？　別にいいさ、そんなこと」

ひよつとして、今のを聞かれてしまったか。狼狽するヴォルグを見上げ、彼女は小さな笑いを洩らした。そして幾分とろんとした瞳を、眩い街並みへ滑らせる。

「……フィアンナ達、大丈夫かしら」

「たぶん心配いらさないさ。お守りの補充も、ちゃんとかけてたみたいだし」

「ふうん。なら、無理して追いかけてなくてもよさそうね」

「病み上がりが言う台詞じゃないな。今は人のことよりも、自分の身体を心配しろよ」

「あはは、そりゃそうよね。でも、こうしてるのにも飽き飽きしちゃった」

ゆっくりと起こした上半身を、シエラは腕を頭上に伸ばしてみせる。

「そんな不安そうな顔しないでよ。まだちょっとふらふらするけど、もう一晩眠れば大丈夫だから」

身体の方はそうだろう。だが、ヴォルグが心配だったのは、それよりも精神

的なことだった。仕草や台詞とは裏腹に、彼女の声には張りが無い。

「あのさ、ヴォルグ……」

「ん？」

無理矢理の微笑みを無言で見つめ、シエラは暫し何事か考えている様子だった。何度か動きかけた唇が、やがてきゅっと引きしめられる。

「私の義父さんは護衛者だった。それは何度か話したわよね？」

「おいおい。いきなりなんだよ」

「……教えてあげるわ。何があったのか知りたいんでしょ？」

「そりゃあ、な」

無論、気になっていないわけがない。だが、向けられた瞳の緊張が、ヴォルグを激しく躊躇させた。

同情するのは簡単だ。出会った頃に彼女は言った。だが、それだけではなんの救いにもなりはしないと。

「けど、遠慮しといた方が良さそうだ」

「待って！」

立ち上がりかけたヴォルグの手首を、柔らかな掌がつかまえた。とてもそれとは思えぬほどの、ゆっくりとした瞬きがくり返される。現れ消える眼差しは、苦しげな惑いに満ちていた。

「シエ、ラ？」

「恩を着せるつもりじゃないの。本当は私がそうしたい、聞いて欲しいんだと思う。だから、ね？ いいでしょう？」

「俺なんかでいいのなら、いくらだって付き合うさ。きつと、なんにも言っち

「やれないけどね」

「え？ ……うん、それでもいいのよ」

何故かくすりと笑いを挟んでから、彼女はその頃のことを語りはじめた。ゼフィルたちとともに豊かな故国を旅して回った、賑やかで充実した日々の記憶を。

彼女の義父は、レフィタルにその名を馳せた護衛者だった。こと同業者に限って言えば、「疾風のゼフィル」を知らぬ者など一人としていなかった。

彼と亡き妻の間には、シエラと同じ年の実子があつた。が、義父はなんら分け隔てることなく、二人を同じように抱きしめ、同じように叱ってくれた。幼心にもそんな義父が誇らしかったし何より大好きだったから、やがて護衛者を志すようになったのも当然と言えば当然だった。

「フィアンナはね……」

「そうか。つまりゼフィルの実の娘か」

「うん。なにかにつけて張り合ってたけど、でも仲良かったのよ。まるで、ほんとの姉妹みたいに」

共に旅をしていた頃は、本当に楽しかった。そう彼女は言った。同時に自分の力に自惚れていた、と。法術の伸びも顕著だったし、ゼフィルと一緒にいることで己の名前も知れていく。

「義父さんに何度か窘められたけど、私は生返事ばかりしてた。まったく、救いようがないわよね。もしもあの頃に戻れるんなら、この手でひっぱたいわりたいわ」

そして、凶事はやってきた。その日の戦いにおいても、シエラたちは実力を

遺憾なく発揮していた。手強いと見て取った盗賊たちは、やがて次々と後退をはじめめる。

護衛者の仕事は荷を守ることであり、敵を殺すことでは決してない。そんな義父の教えを、シエラは思いだしもなかった。ただ本能的に追撃し、気がついた時にはすっかり囲まれてしまっていた。

「あつという間に血の気が引いたわ。足が震えて、立つてられないくらいだった。身のほどをやつと思いつたけど、そんなの後の祭りよね」

包囲の輪を、敵はじりじりと狭めてくる。たとえ術を使っても、すべてを倒すのは到底無理だ。もう、どうすればいいか分からなかった。狼狽えきった彼女に向けて、敵が一齐にその身を踊らす。

「ひいっ！」

ゼフィルが斬りこんできたのは、その刹那だった。凄まじい形相でたちまち数人を斬り倒し、そして振り返り様に彼女を促す。

「逃げる！　ここは俺が引き受ける」

「私、どうしたと思う？」

毛布をぎゅっと握りしめ、彼女はうなだれた頭を左右に振った。

「逃げたのよ。一度も後ろを振り返らずに、悲鳴を上げておしっこ洩らして。フィアンナが怒るのも当たり前前よね。さんざん娘面しておいて、危なくなったら一目散なもの」

「シエラ……」

「これで分かったでしょ？　義父さんは私のせいで死んだのよ。わたしが、私が義父さんを殺したの！」

ひきつった微笑みから、ヴォルグはたまらず眼をそらした。小刻みに震える拳の上に、ぽたぽたと透明な滴が落ちる。

「それからずっと一人でやってきて、もう忘れたらと思った。だけど、やっぱりそうじゃなかったみたい。あの娘に会ってから苦しくて、なんだか辛くて仕方がないの」

彼女が、なぜあれほど仕事に執着するのか。その理由の一端を、ヴォルグはようやくつかめた気がした。

「なるほどね。見方によってはそうかもな」

やはり、慰めの言葉は見つからない。しかし、見つからないままに唇が動いていた。自分を責めてばかりでは、いつか彼女は潰れてしまう。

「見方なんて関係ないわ！ 誰がどう見たって事実の一つよ。そりゃ慰めてくれる人もいたけれど、でも私が義父さんを見捨てたのは本当なもの」

「まあ、落ち着けよ。あのさシエラ、俺はこう思うんだ。お前の親父さん、幸せだったんじゃないかって」

そう言い終わるより早く、枕が飛んだ。それは驚くほどの正確さで、ヴォルグの顔を直撃する。

「つてて！ なにすんだよ」

「ふざけたこと言わないで！ 義父さんが幸せ♡ 莫迦な娘のおかげで命を落として、そのどろろが幸せだって♡」

顔を真っ赤にした相棒に、ヴォルグは何も答えなかった。代わりに、傷跡だらけの腕がそっと彼女の後ろに回る。

「落ち着けって言っただろ」

「……！ ひっ！」

そのままぎゅっと抱きしめると、小さな身体が大きく震えた。だが、ヴォルグは力を抜こうとしない。

「は、離してよ！」

「俺は誰も守れなかった。親父もお袋も、姉貴も。誰一人助けてやれなかったんだ」

「……？ なに……、言ってるの？」

「俺んちは武器屋でさ。回りに剣やら楯やらがごろごろしてるんだぜ。なのに手が震えちまって、全然いうときかないんだ。剣術には自信があったはずなのに、結局なんにもできなかつたよ」

悪夢のような光景がたちまち心に蘇り、ヴォルグは思わず眉をひそめた。が、それをやがて、強ばった微笑みが侵食していく。思いだしたくもない出来事を励ましの材料に使っている。そんな己の姿が、どうにも滑稽に感じられた。

「ヴォ、ルグ？」

「親父とお袋は胸をやられて。たぶん即死だったと思うよ。でも、それだけならまだ良かった。姉貴たちは俺の目の前で奴らに……、犯されたんだ。助けようとするんだけど俺も背中をやられてさ、もう身体が動かなかつた。悔しくて情けなくて涙が出たよ」

「ねえ？ あのお墓って、ひよっとして？」

震えの止まらぬ腕のなかから、潤んだ瞳がこちらを見上げる。

「ああ。あの日な、命日だったんだ。あんまり行かないようにしてるんだけど、せめてそんな時くらいはなあ」

「そう……。そうだったんだ」

「なあ、シエラ。さつき忘れてたって言ったけど、でも忘れちゃいけないんじゃないか？ 親父さんがそうしたのは、きつとお前を助けたかったからだろう？ そうできるだけの力を、ちゃんと持ってたからだろう？ それを誇りにしてやらなくちゃ、親としたりって立つ瀬がないぜ」

あらぬ方向に視線を向けた、シエラの瞼が静かに閉じた。硬直しきった身体から、徐々に力が抜けていく。

「そんなこと……、言われなくたって分かってるわよ」

そして長い沈黙が訪れた。柔らかな栗毛が腕に擦れ、頬が胸に押しつけられる。

「ねえ、ヴォルグ？」

「ん？」

「もういい加減に離れてくれない？ 風邪、伝染ちやっても知らないから」

「もらってやるよ、それくらい。よく言うじゃないか、人に伝染すと良くなるって」

「確かにね。ありがたくって涙が出るわ」

目尻をこすりつつ笑った彼女は、しかしヴォルグを思いきり突き放した。

「だけど、それじゃ意味ないの！ 明日にでもガイゼルに戻って、次の仕事を見つけないきゃ。給仕だってあるんだから、あんたの看病なんかしてられないわよ」

「お、調子出てきたみたいじゃないか。やっぱりお前はそうでなくちゃな」
ぐっと突きだしてみせた拳にシエラはいくぶん躊躇いながら、それでもいつ

も同様に応えてみせた。

「さて、と。安心したところで、ちょっと外でもぶらつくか。食事運んでもらうように頼んどくから、しつかり喰ってちゃんと寝てろよ」

「うん。……分かった」

彼の背中を見送りながら、シエラはその身をそつと横たえる。と、壁にかけられた青いリボンが目に留まった。汚れてしまったものの代わりにと、ヴォルグが買っておいたものだった。

「ふうん、ああ、かあ。人の好みも聞かないで、自分勝手に決めちゃって」

彼女は頭に手をやって、そのままくすぐすと寝台を揺らす。そして、ほどなくそれが収まると、毛布を一息に跳ねのけた。

「冗談じゃないわよ。のんびり寝てなんかいらんないわ」

真顔で小さく呟きながら、汗くさい寝着を脱ぎすてる。そして洗いざらしの服を慌ただしく着こむと、最後に真新しいリボンをきゅっと頭に巻きつけた。蝶を栗毛から覗かせる、義父お気に入り結び方そのままに。

「どうだった？」

おんぼろな階段を下りた先、泊まり客のための食堂でヴォルグはそつと声を潜めた。拭かれたばかりの卓上には、葡萄酒の杯がぽつんと寂しげに載っている。午後の真ん中ということもあり、周囲に他の客は一人もいない。

「どうにも手がかりがないらしいね。やはり、あれだけじゃ無理そうだとさ」

頬杖をついたまま答えたのはこの宿屋の主人、ナウベルである。この白髪頭の男も、自分同様に裏の顔をもっている。それは出発の朝、指令書で知ったこ

とだった。「もしも何かつかめたら、この男まで伝えて欲しい」と。こんな小さな町にまで配下がいるとは思わなかったが、おかげで随分と助かった。

「あれ」というのは、賊の遺体のことである。ヴォルグの知らせを受けてすぐ、戦場から回収してきたらしい。

「なんにしたって、あいつらただの賊じゃない。傭兵か、そうじゃければ私兵だけ」

「だろうな。黒幕を突き止められればそれで一件落着なんだが、このままじゃ間に合わんだろう。その商隊、たぶんもう一度襲われるぞ」

「たぶんじゃなくて間違いない、だろ」

仲介屋すらない町で、おいそれと空いた護衛者は見つかるまい。そこを襲われてしまったら、今度は一たまりもないだろう。

「それで？ あいつら、来てくれそうなのか？」

「おそらく明日の朝には集まるだろう。そうはいつでも数人だがね」

「まあ、普通の連中じゃないからな。それでもなんとかなるんじゃないか？」

「いや、当人はそう樂觀してもいなくてな。お前さんに同行して欲しいと言ってる。どうだ、いけるか？」

「そんなこといちいち聞くなよ。どうせ嫌とは言えないんだろ？」

そう笑って見せつつも、ヴォルグは内心困惑していた。さて、シエラにどう説明するか、と。独り宿屋で待っているなど、彼女が頷くはずもない。だが、そんな思案は結局のところ徒労に終わった。

「へへーん！ ようやく現場を押さえられたわ」

激しく鳴いた扉の向こうで、シエラがにやりと笑ってみせる。

「お、おいおい。そんなとこでなにしてるんだ？ 大人しく寝てろって言った
だろ？」

「ごまかそうだったってそうはいかないわよ。最初から最後まで、ばっちり聞か
せてもらったからね」

「……意外と執念深いんだな。もう諦めたと思ってたのに」

「甘い甘い。そんなわけないじゃない」

天を仰ぐヴォルグに、彼女はぱたぱたと駆けよってきた。そして、青く澄ん
だ瞳で、苦り切った表情をじっと見つめる。

「迷惑だつていうんなら、もうこれ以上は詮索しない。その代わりに、私も一緒
に連れてって」

「そう来たか。……こいつは参ったな」

「お願い。私、どうしてもフィアンナの、あの娘の力になりたいの」

助けを求めるヴォルグの視線に、しかしナウベルは応えない。白髪頭を掻き
ながら、ただ肩をすくめるのみだった。



薄明の平原を、叫声と足音が埋めつくす。あちこちで飛び散る鮮血が吐き気
をもよおす異臭を放ち、心地よい草の香りは今や微塵も感じられない。

「ちくしょう！ もう少しで帝都へたどり着けるのに」

迫りくる剣の波を術の旋風で防ぎつつ、フィアンナは苦々しげに吐き捨てた。
どこをどう見ても、戦況はこちらに不利だ。輪形陣は徐々に、しかし確実に押

しつぷされており、背後の馬車群はもうすぐそこにまで迫っている。

ヴォルグの憂いは、最悪の形で中していた。結局、護衛者の補充はままならず、商隊は見切り発車を余儀なくされた。なんとか帝都に入れば、存分に態勢を整えられる。腕のいい護衛者も、星の数ほどいるだろう。だが、覚悟を決めていたとおり、奴らは大人しく待つてなどいなかった。

頭数においても技量においても、その戦力ははるか先日の上をいく。はじめから予備戦力が控えていた。そう考えるのが妥当だろう。

「まるで軍隊じゃないの。こいつら、いったい何者なのよ」

答えは勿論見つかからない。その代わりに、ふとシエラの姿が脳裏を過ぎった。

もしもここに彼女がいれば、どんなに心強いことだろう。相手が何者であろうとも、決して押されっぱなしになりなどしない。

——まったく何をやってるの！ 風邪で仕事投げ出すなんて、あなたらしくないじゃない。

そう言っただけでやりたいが、しかしここに彼女はいない。しかめた顔を左右に振って、フィアンナは再び法語を紡ぎはじめる。その刹那だった。捉えきれなかった敵の姿が、突然目の前に現れたのは。

「もらったああ！」

振り上げられた剣身が、焚き火の炎で真っ赤に染まる。完全に不意をつかれたフィアンナは、腰の短剣をつかむことすらできなかった。この間合いでは、もはや避けようにも避けられない。

護衛の仕事をしている以上、死の影はいつも己の側にある。そんな覚悟はしていたものの、まさかこんな田舎で斃れることになろうとは。

——だめだ！

鋭い殺気を浴びせかけられ、彼女はぎゅっと拳を握った。だが、いくら時が流れても、敵の刃は襲ってこない。

「……？ あっ！」

瞼をあけたフィアンナの、編みこみ髪が大きく揺れた。返り血を拭うヴォルグを背にして、彼女が掌を振っている。

「危ないところだったわね。周りにいつも気を配って、義父さんの口癖忘れちゃったの？」

新たに戦いに加わったのは、シエラ達だけではないらしかった。一様に漆黒の鎧をまとった剣士が数人、敵の側面から急襲をかけている。

「な、に？ どういうことよ？」

掠れた呟きにシエラは一瞬にこりと笑い、それから口元を引きしめなおす。

「ほら、ぼうっとしてないで例のやつやるわよ！ もう一押しすれば、こっちの勝ちだわ」

ぱっと表情を輝かせつつ、フィアンナは無言の頷きでそれに応えた。

《吹き行く風よ、ここに集え》《吹き行く風よ、ここに集え》

白みはじめた空の下、二人の詠唱がはじまった。美しく溶けあい、力強く支えあう抑揚は、周囲の喧噪をもともしない。

《大いなる主の許しを請うて、暫しその流れを我が意に委ねよ》

やがて二本の腕が振り払われると、唸りをあげて冷気が動いた。初めに土埃が、次に石ころが、そしてついには根こそぎにされた草たちまでが、月に向かつて渦を巻く。その丈も激しさも、先日のものとは比較にならない。

「お、おい！　いくらなんでもやり過ぎだつて！」

頭を抱えて這いつくばった、ヴォルグが声を張り上げる。しかし、それは地響きにかき消され、風に容赦なく引きちぎられた。

義父の助力があつたにせよ、まだ若かった彼女達が何故その名を売ることができたのか。眼前の光景が、ヴォルグにそれを教えてくれた。敵陣に突き進む渦の下では、もう賊も護衛者もありはしない。その牙から逃れようと、みな散り散りになって逃げ回っている。凶暴極まりない竜巻がようやくその姿を消した時、既に戦いの行方は決していた。

はるかな地平線から、やがて眩い朝日が顔をだす。小鳥のさえざる草原に、しかし草の息吹きは感じられない。穏やかに吹き行く風も、血の臭いを運び去ってはくれないようだ。

「いや、助かったよ。だけど、あんた達いったい誰だい？」

アルベインが差し出した掌に、黒づくめの若者は苦笑で応えた。返り血にまみれた金髪を、細い指先がかき回す。

「正義の味方、つてことにしといて下さい。まあ、本当はそんな立派なもんじやありませんけどね」

正義の味方が聞いて呆れる。彼がそこに含ませた意味を、ヴォルグは勿論知っていた。

将軍リュティスの私兵「白狼」は公的な組織では対処できない、様々な裏の仕事に携わっている。協力員とでもいうべき自分と違って、彼らは皆が皆、殺しと諜報の専門家なのだ。

「期待に添えないかもしれないが、できる限りの礼がしたい。どうしたらいい？」

「そうですねえ。では、少し席を外して下さい。ヴォルグさんとシエラさんに、内緒の話があるものですから」

「それだけでいいの？ 少しくらいなら、金にも余裕があるんだが」

「あはは、お金なんていりません。正義の味方は、報酬を期待したりはしないんですよ」

「へえ、そりゃ欲のないこった」

納得できない表情を浮かべながらも、アルベインは馬車の方へと戻っていく。そこでは彼の部下達が、出発準備に大わらわだ。

「主には私の方から報告しておきます。でも、いいですか？ 大目に見るのはこの一度きりですよ」

たちまち鋭くなった眼光に、しかしシエラは一步も引かない。

「分かってるわ。言ったじゃない、これは取り引きだって。ヴォルグのことを嗅ぎ回らないかわりに、私も連れていってくれる。そういう約束だったでしょ」

「そうでした。でも、決して裏切らないで下さいね。一緒に頭を下げてくれた、ヴォルグさんを悲しませることになりますよ」

命の保証はできない。つまりはそういうことだろう。はらはらと成りゆきを見守るヴォルグに、若者は小さな声でささやいた。

「いや、ほっとしました。実は彼女、結構いいところまで嗅ぎつけていますね。私達も困りはてていたんです」

驚き振り向けた視線の先で、彼は頭を掻きながら笑ってみせた。いつもの演

技とはまったく違う、柔らかかで人懐っこい笑みだった。さすが秘蔵っ子だけあって、こんなところもリユティスに似ている。

「お宅にお邪魔する時なんか、もうどきどきのし通しでした。どこかで見られているんじゃないかって、何度確かめても気になっちゃって」

「なんだよ。そこまで知つといて、見逃してくれたのか？」

「あの方がそうしろというものですから。あなたが変な女を選ぶはずない。放つておいても大丈夫だと」

「当たり前だろ。あいつは俺の……、相棒なんだぜ」

「そうみたいです。私に頼み込んできた時の真剣さは、信用するに値します。

それに、今回はあなた方の知らせで貴重な捕虜を捕らえることができました。

これは強力な武器になります。たぶん、襲撃もすつかり収まることでしょう」

「そうなってくれるといいけどな。で、黒幕は誰なんだよ？」

「一部の有力貴族達というところですか。まあ、名前はちよつと明かせませんがね」

賊達を仲間が引つ立てていく様を、涼しげな瞳が追いかける。

「いいですか、本当に今度だけです。二度と例外は認めませんから、そのつもりでいて下さい」

声を潜めた彼らの会話を、シエラはむずむずしながら見やっていた。聞き耳を立てたいところだが、誓いを思い出して我慢する。と、そこで皮鎧の肩を誰かが叩いた。

「あ……」

振り返ってみると、両腕を背中中で組んだフィアンナがじつとこちらを見下ろ

している。強ばった端正な顔立ちには、あの頃の笑みなど微塵もなかった。

「ガイゼルに戻るんですって？」

「うん。まだだるさが抜けないし、無理して迷惑かけるといけないからね」

「それならさ、別れの前にちょっと話をしておかない？」

「え？ う、うん、いいけど」

「良かった。じゃあ、さっそく行きましょ」

彼女はシェラの手を取って、草原のなかへと引いていく。

のどかだった。聞こえるのは降りそそぐさえずりと風に揺れる葉のざわめきのみで、指先ほどに見える仲間達の声など勿論届くはずもない。あの濃密な血の臭いも、ここまではさすがに及ばぬようである。

「うん。この辺りでいいかしら」

シェラの掌を離れた彼女は、そのままさらに歩みを進めた。それから片足を軸にして、くるりと肩を回してみせる。

「謝らないわよ。それにお礼も言わない。あたし、怒ってるんだから」

「……構わないわ。そんなつもりで来たんじゃないもの」

「ふーん。それじゃどういいうつもりだったのよ？」

ぐつと身を乗りだされると、シェラの顔にわずかな躊躇いが走った。彼女は一旦それを天に向け、それからもう一度フィアンナを見つめなおす。

「義父さんの娘として、私はどうするべきなんだろうって思ったの。ただ……、それだけよ」

「そう、か。そういうことかあ。期待してたのがっかりだな」

「ごめんね。やっぱり余計なお世話だった？」

「誰もそんなこと言ってないでしょ！　ね、分からないの？　あなた、本当に分かってないの？」

フィアンナの顔が、みるみる紅く染まっていく。すたすたと歩み寄ってきたその掌が、シエラの両肩をがっしりつかんだ。

「ちよ、ちよっと！　なにすんのよ？」

「それじゃあね、どうして怒ってるか教えてあげるわ」

夢中で身体を引こうとして、しかしシエラの動きはそこで止まった。彼女の瞳が潤んでいるのが、はつきり分かったからだった。

「父さんのことは仕方なかった。それくらい分かってたつもり。そりゃ少しは恨んだりもしたけれど、でもあたしだって護衛者だし、なにより家族のことだもの」

「フィアンナ……」

「あの晩、あなたはそっと家を出ていった。あたしを独りぼっちにしてね。なんでよ？　どうして、なんにも言ってくれなかったの？」

「無理なこと言わないで。いくら言葉で謝ったって、義父さんは帰ってなんかこないのよ。私、悪くて。あんたに申しわけなくて」

言い終わらないうちに、彼女の頬を痛みが走った。腕を振り払った姿勢のままの、フィアンナの眼からついにぼろりと涙が落ちる。

「み、み、見損なわないでよ！　あたし、あなたのこと本当の姉妹だと思ってた。なんでも打ち明けられるし、分かりあえると思ってた。なのに……、なのに！」

「ごめん、なさい。でも、私、そんなつもりじゃ」

「もういいっ！ もう何も聞きたくないわよ」

会話を強引に打ち切って、フィアンナは脱兎の如く走りだす。だが、シエラが呼び止めるよりも早く、その足は何故か再び止められた。

「ねえ？ いつか宿屋を開くんだって、昔そう言ってたわよね？ 今もやっぱりそのつもり？」

「……うん、そのつもり。今でも、ね」

「そうかあ。じゃあ夢が叶った時にはさ、あたしを一番に招待してよ。また無視したら、今度こそ絶対許さないからね」

こちらの返事も聞かぬまま、彼女は走り去っていく。その背中を見つめつつ、シエラは頬の疼きをなでた。

「なによ。言いたいこと言ってくれちゃって」

気がつけば、彼方の馬車群の傍らで誰かがこちらを見つめている。凝らした視線がやがて絡むと、相手は振り上げた腕を大きく左右に揺らしてみせた。

「なんだ、ヴォルグ、か。子どもじゃないんだから、そういうの止めなさいって」

雲一つない空を見上げつつ、胸いっぱい息を吸いこむ。やがて笑いとなって洩れでたそれを、吹き行く風がそつと何処かへ運んでいった。



彼女がナゼルの店に赴いたのは、それから数日後のことである。その腕には皮袋が下げられ、閉じ口からは買い出しの時と同様、野菜やらパンやらが顔を

覗かせていた。

昼下がりの店内に客の姿は一人もなく、前かけ姿のルファールが独り掃除に励んでいる。

「頑張ってるわね」

「はい？ ……あっ！」

視線を振り向けたルファールの、檸檬色の服がふわりと揺れた。手にした箒を放りだし、一目散に駆けよってくる。

「お帰りなさい、先輩！ ずいぶん早く戻れたんですね」

「うーん。そのことなんだけどさあ……」

「は、あ？」

「ごめんっ！ この通り」

合わせた両手に額をつけると、たちまちルファールの顔に陰りが差した。細かく震える唇が、両の掌に覆われる。

「そ、それじゃ、まさか」

「ううん、違う違う。そんなに深刻な話じゃないの。だから、安心して聞いてちょうだい」

「そんなこと言ったって。いったい、どういふことなんですか？」

「ええっとねえ。どこから話したらいいんだろうな」

旧友や白狼についてはぼかしつつ、シェラは事の成りゆきを説明していく。話が進むにしたがって、ルファールの表情は徐々に穏やかさを取り戻していった。引ききってしまった血の気も、すっかり元通りになったようである。

「そうですかあ。じゃあ、もう襲われる心配はないんですね」

「たぶんね。あと何日かすれば、元気に戻ってくるんじゃないの？ 馬車いっぱいばいに小麦を積んでさ」

「ありがとうございます！ 兄さんもきつと感謝してると思います」

「や、やめてよ。私の話、ちゃんと聞いてなかったの？ いいとこなしだったって言ったでしょ？」

慌てて振った掌を、ルファールはぎゅつと握りしめてきた。出し抜けの激痛に耐えかねて、紅潮した顔を思わずしかめる。が、彼女の潤んだ瞳に、それは映っていないらしかった。

「そんなことはありませんよ。だって、約束通り荷を守ってくれたんじゃないですか。私、ずっと自分を励ましていたんです。先輩がいるんだから、ぜったい大丈夫なんだって」

「そう言ってくれるのは嬉しいけどさ」

眉間にしわをよせたまま、シエラは空いている手を差しあげた。

「あんまり痛くて、ちよつと素直に喜べないな」

頬をつねられたルファールの、円い眼が緩慢な瞬きをくりかえす。ほどなくすると、ようやくその両腕から力が抜けた。ぴよんと飛び退いた彼女の肩が、みるみる小さくすぼまっていく。

「ご、ごめんなさいっ！ あんまり嬉しくて、つい夢中になっちゃって」

「あはは、別にいいわよ。もしも相手がお客だったら、承知しないところだけどね」

指を吹き冷ましながらの笑いは、やがてルファールにも伝わった。薄暗い店内が、暫しころころした声に満たされる。

「さあ、これで用事も終わったし、私そろそろ帰るわね」

「え、もうですか？ 兄さんのこと、色々聞かせて欲しいのに」

「ごめんね。ちょっと急いでるもんだから」

いっぱいの皮袋をぶら下げて、彼女は扉の向こうに姿を消した。床の箒を拾いあげ、再び揺らしはじめたところで、ふとルファールの首が小さく傾く。

「どうしたんだろ？ 先輩、ちょっと変わったみたい」

気のせいかもしれない。だが、言葉や仕草が心なし柔らかくなっている。そう彼女には感じられた。立てた柄頭に顎を寄せ、再びあれこれと考えてみる。だが、詳細を知らぬままの推理が、真実に行き当たるわけなど勿論なかった。

「昼御飯にはちよつと遅くなっちゃったわね」

ナゼルの店を出たその足で、シエラは下町へとやってきた。粗末な家屋が軒を連ねる、ごみごみした街並みはいつもの通り賑やかだった。

井戸端会議の主婦達や追いかけてこの子どもらをしり目に、埃っぽい砂利道をひたすら歩く。いくつもの角を曲がり、袋を持つ手がそろそろ痺れはじめてきたところで、彼女はようやく目的の賃貸住宅へたどり着いた。

「さて、と。あいつ、ちゃんと寝てるかな？」

ぎしぎしと鳴く階段を、軽やかな足取りで駆け上がる。扉が並ぶ廊下に入ると、突き当たりの窓から穏やかな風が吹きこんでいた。ひんやりした感覚が、火照った身体に心地よい。取り出した白布で額の汗を拭いつつ、彼女は眼下の取っ手を引きよせた。

「調子はどう？」

「よお、シエラか。もう最悪だよ」

綺麗に片づけられた部屋のなか、寝台のヴォルグが手を挙げる。あのごみ捨て場の如き状況を、ルフールもよくぞここまでしたものだ。掃除に天賦の才があるのか、それともあの怪力が物を言ったのか。いずれにしても、きつと大奮闘だったことだろう。

「さすがにお前からもらった風邪だよな。相変わらず、全然熱が下がらないよ」

「人のせいにしてないですよ。そんなの、あなたの問題じゃない。大体なによ。たかがそれぐらいでひいひい言つてさ」

「仕方ないだろ。こんな熱、久しぶりなんだから」

不満げにそっぽを向いた、その顔色は確かに悪い。くるまった毛布ごしにも、身体の小刻みな震えが分かる。だが、シエラはそれでも容赦をしない。

「あんたねえ、少しは反省しなさいよ。看病しなくちゃならないおかげで、こっちまで開店休業なんだから」

「ひどい言われようだなあ。だったら、独りで仕事してこいよ」

「そりゃあね。でも、そういうわけにもいかないでしょ」

困惑まじりの表情が、やがて皮袋の後ろに隠れる。

「まあ、これからシエラ様特製スープを作つてあげるからさ。これさえ飲めば、風邪なんて一撃で治るわよ」

「へえ、そりゃ楽しみだな。持つべきものは相棒つてところかね」

「そうね。今度ばかりは、ちよつとだけそう思っちゃったかな」

微笑むシエラの唇に、人差し指が寄せられた。そしてそれがゆっくりと、ヴォルグの額に下りてくる。

「ありがとう。恩に着るわ」

青く澄んだ瞳のなかに、驚き慌てる自分が見える。しっとりした指先は柔らかく、そしてとても温かかった。

了

着 稿 一九九九年 三月二十三日
第一版 一九九九年 七月十一日